

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	楊 駒
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論 文 題 目			
Life Histories of Chinese Students in Prewar Tokyo Higher Normal School			
論文審査担当者			
主 査	教授	山田 浩之	
審査委員	教授	丸山 恭司	
審査委員	教授	藤村 正司	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は戦前期の日本において東京高等師範学校に在学した中国人留学生のライフヒストリーを検討し、日本への留学の決定、学校生活、卒業後のキャリアを明らかにしたものである。</p> <p>これまでの留学生に関する歴史的な研究は、主に制度的な側面に関心がもたれ、いわばトップダウンの研究が中心であった。つまり、留学後に高い名声を得た者を中心に、いかなる機関に留学したか、また、留学後にどのような業績をあげたかが検討されてきた。留学することによりオートマチックに知識を身につけ、帰国後のキャリアが確定するというモデルでの分析が中心であったことになる。しかし、実際には留学生の多くは、多様な動機で留学し、在学期間中はさまざまな経験をしている。したがって、帰国後のキャリアにも、たんに教育機関で得た知識のみが影響しているのではなく、機関内外での経験が多大な影響を与えている。本論文は、東京高等師範学校に留学した中国人留学生の経験とその影響をライフヒストリーによりミクロな視点で検討しようとしたものである。</p> <p>論文の構成は次の通りである。</p> <p>第1章では本論文の対象とする戦間期の中国からの留学生、および東京高等師範学校の状況について概観した。1907年の「五校特約」により、東京高等師範学校などが一定数の中国人留学生を受け入れることになった。奨学金が支給されたため、この制度による留学希望者の競争率は高く、留学は決して容易ではなかった。</p> <p>第2章では、ライフヒストリーの方法論的な検討が行われた。ライフヒストリーはインタビューによる現代の調査のみでなく、日記や手紙、回想録など多様な質的資料によって歴史的な分析をも可能にする手法であることが理論的に検証された。その上で、歴史研究におけるライフヒストリーは個人の生活史を再構築するとともに、その背景にある当時の社会的構造を示すものであることが示された。</p> <p>第3章では、中国人留学生の進学過程が検証されている。中国人留学生にとって奨学金を得て日本で高等教育を受ける機会を得ることは魅力的であり、日本への留学意欲は高いものであった。しかし、進学する機関や専攻は個々人の関心によって選択されたわけではなく、確実に進学するために功利的に選択されることも少なくなかったとされる。</p>			

第4章では、中国人留学生の東京高等師範学校内での生活が検証されている。東京高等師範学校は中等教員養成機関として位置づけられていたが、実際にはカリキュラムにおける教育学や心理学に関する内容はごくわずかでしかなく、それぞれの専攻に応じた専門教科の内容を深く学ぶことが重視されていた。したがって、中国人留学生も教育学・心理学ではなく、各自の専門を中心に学習していた。だがその教育内容は必ずしも留学生の要求に応えるものではなかったことが本論文で明らかにされている。

第5章では、中国人留学生の学校外での経験が検討されている。日本人学生とは異なり、中国人留学生は東京高等師範学校が持つ日本のナショナリズムに感化されることはなかった。それよりも学校外の新たな西洋文化、とくに演劇や英文学などに耽溺していたことが指摘された。

第6章では帰国後のキャリアについて検証されている。本章では、ライフヒストリーのみならず、中国のデータベースを用い、東京高等師範学校に留学経験のある128名のキャリアが分析されている。その結果、中国人留学生は東京高等師範学校で必ずしも「教育」を深く学んだわけではないが、その多くが主として「教育」に関わる職業、つまり、教育学研究者や教育行政官になっていたことが明らかにされた。

終章では本研究の結果をもとに、その意義が考察されている。東京高等師範学校で教育学を十分に学ばなくとも、日本人学生は「良い」教員へと社会化されていた。しかし、中国人留学生は、必ずしもそうした社会化が行われず、むしろ専門科目を深く学び、学外で多様な西洋文化に触れていた。しかし、帰国後は教育の専門家として扱われており、中国人留学生もまた、卒業後のキャリアにおいて社会から教育機関の持つ「チャーター」の影響を受けていたとされる。

本論文は以下の点で高く評価できる。

第1に、戦前における留学生の経験をライフヒストリーにより明らかにしたことである。留学生の歴史的な研究は、実際の経験ではなく、留学すること自体が能力を形成するものとして分析されてきた。つまり、先行研究ではマクロな制度的側面ばかりが強調されてきた。しかし、本論文はボトムアップの視点により、留学生の経験をつぶさに描き出しており、この点は高く評価されるべきであろう。

第2に、留学生がたんに学校が与える知識を吸収したのではなく、それと葛藤し、あるいは学外の多様な文化を吸収していたことをミクロな視点により明らかにした点である。機関が提供する知識は必ずしも留学生によって積極的に学ばれているわけではない。教育方法などに反発する留学生も存在していた。しかし、その経験と学外での余暇や遊びがあいまって総体として留学経験を形成していたことが分析された点はいへん興味深い。

第3に、こうした留学生の経験が社会からのチャーターとして帰国後のキャリアに大きな影響を与えていることを明らかにした点が評価できよう。何を学んだかではなく、日本に、あるいは東京高等師範学校に進学したことが個人のキャリアを決定していたのである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年2月14日